

日本的な「宗教意識」の構造*

—「価値観と宗教意識」に関する全国調査の結果の分析—

真 鍋 一 史**

I. はじめに

近年、社会科学の領域において、「価値観」というテーマが、新しい様相——たとえばポストモダンの価値観の出現など——のもとに、再び活発に取りあげられるようになってきた。こうして、1980年代以降、「ヨーロッパ価値観調査 (European Values Study)」「世界価値観調査 (World Values survey)」「国際社会調査プログラム (International Social Survey Programme)」などの、人びとの価値観に焦点を合わせた大規模な国際比較調査が実施されるようになってきた [真鍋、2003]。これらの質問紙調査では、多くの場合、その中心に「宗教意識」が位置づけられてきた。その結果、「欧米の国々においては宗教意識は人びとの価値・信念・態度と強く結びついているが、日本ではそのような傾向は見出せない」ことが検証されてきた。「無宗教の国・日本」というフレーズが一般化してきたのも、このようなコンテキストにおいてである [真鍋と Jagodzinski, 2000、真鍋、Jagodzinski と小野寺、2000、Manabe, Jagodzinski and Onodera, 2002、真鍋と Jagodzinski, 2002、Manabe and Jagodzinski, 2002、Jagodzinski and Manabe, 2003、真鍋、2003]。しかし、それは欧米型の宗教観にもとづくからであって、日本独自の宗教意識を射程に入れて検討するならば、必ずや別の側面が見えてくるに違いない。これが今回の調査研究 (全国調査) の基本的な問題関心である。

そこで、つぎに、この全国調査の位置づけについて述べておかなければならない。調査は、平成17年度～平成19年度科学研究費補助金 (文部科学

省・日本学術振興会) 基盤研究 (A) による共同研究「現代人の価値意識と宗教意識の国際比較研究——脱欧入亜の視点から——」(課題番号17203036)の一環としてなされたものである。この共同研究は、「事例研究・質的調査グループ (大村英昭が統括)」と「質問紙調査・量的調査グループ (真鍋一史が統括)」から構成され、これまで、以下のような研究がなされてきた。

(1) 「価値観と宗教意識」に関する内外の先行研究——「理論的研究」と「実証的研究」——の成果についてのレビューと、そのような成果を生み出してきた「調査データ・資料」の収集・整理・まとめ。

(2) この研究領域における方法論的問題、とくに国際比較調査における religiosity の観察と測定の問題の提起と、そのような問題の解決の方法に関する提案。

(3) この研究領域における今日の問題・戦略的問題の1つとして——従来の「教義宗教」の考え方からするならば、ここに取りあげる現象は、いわゆる「世俗化 (secularization)」の事例にはかならない——、人びとの宗教的感性・行動、とくに世界における「火葬化の進展」に伴う遺骨灰について考え方、感じ方とその取り扱い、動物慰霊祭、エンバーミング、ペット・ロスなどのテーマに焦点を合わせた、米国ハワイと西海岸、韓国、タイ、台湾、沖縄、北欧、とくにスウェーデンなどでの「フィールド調査——実地観察・聞き取り調査——」の実施。

そして、このような研究を踏まえて、今回の質問紙調査が企画・設計されたのである。

*キーワード：宗教的行動、宗教的信念・感情・意識、宗教のはたらき・機能・性質

**関西学院大学社会学部教授

II. 調査の概要

サンプルは、2006年3月31日現在の住民基本台帳より20歳以上の男女を層化2段無作為抽出した。全国を12の地域に分け、都市規模を16大都市、その他の市、町村に分けて、16大都市から25地点、その他の市から63地点、町村から12地点の合計100地点を抽出し、それぞれの地点から18人ずつの合計1,800人をサンプリングした。

サンプリングと実査は、2007年3月に行なった。調査会社（中央調査社）に委託し、実査は「訪問留め置き法」で行なった。有効回収率は49.2%で有効回答数は882となった。

III. 調査の内容——質問諸項目の分類——

この調査の質問諸項目は、(1)被調査者 (respondent) の社会的属性 (social attribute) ・デモグラフィック要因 (demographic factor) に関する諸項目、(2)日本人の独自の宗教意識を捉える諸項目、(3)人びとの生活・社会・政治をめぐるものの見方・考え方・感じ方・行動の仕方を捉える諸項目、の3種類に分けられる。

一般に質問紙調査の質問諸項目は、その質問の「内容」および「形式」にもとづいて分類される。いうまでもなく、上述の分類はその「内容」にもとづく分類といえる。ここで、3種類の質問諸項目を準備したのは、つぎのような考え方による。まず(1)被調査者の社会的属性・デモグラフィック要因については、これは①今回の質問紙調査のサンプルの母集団 (universe・population) に対する代表性をチェックすることを可能にする、②性、年齢、学歴、職業、所得などと、人びとのものの見方・考え方・感じ方・行動の仕方 (社会科学の用語でいえば、「価値・信念・態度・意見・行動」との関係の分析——一般に「条件分析 (conditional analysis)」と呼ばれる——を可能にする、という2つの意味をもっている。つぎに、(2)日本人の独自の宗教意識については、これは今回の調査の中心的なテーマである日本人の religiosity を捉えるための諸項目である。最後に、(3)人びとの生活・社会・政治をめぐ

るものの見方・考え方・感じ方・行動の仕方、そしてその背後にある価値観については、日本においても「religiosity は人びとの価値・信念・態度と結びついているかどうか」を検証するために準備したものである。

今回のデータ分析 (data analysis) では、まず(2)の諸項目を取りあげる。それは、(2)と(3)の諸項目間の相互の関係の分析に入るに先立って、まず「日本人の宗教意識 (religiosity あるいは religious faith, belief, attitude, feeling, behavior)」と呼ばれるものの全体像——筆者の用語を使うなら、「森」——を把握しておくことが、必要であると考えからである。そして、そのような分析は、やはり「探索的 (exploratory)」あるいは「問題発見的 (heuristic)」な性格を持つものとなるであろう。

つぎに、質問諸項目を、質問——そして同時にその回答の選択肢——の「形式」によって分類する方法としては、「ファセット (Facet)」の考え方がある。

ファセットという考え方は、L. Guttman によって考案された独自の知的創造のアイデアであり、この領域における1つの到達点を示す方法論的な提案といえることができる。S. Shye [1978] は、ファセットという考え方 (ファセット・アプローチ) を3つの領域に区別している。

(1) ファセット・デザイン (Facet Design) : ①観察 (つまり質問紙調査) のための概念装置・枠組みの準備、②質問文とその回答の選択肢のタイプ (response category) の選択、③調査の理論的・仮説的図式を文章の形で表現する独自の技法であるマッピング・センテンス (Mapping Sentence) とストラクタプル (Structuple) の作成。

(2) ファセット・アナリシス (Facet Analysis) : 仮説検証のためのデータ分析の技法、たとえば「尺度分析 (Scalogram Analysis)」「部分尺度分析 (Partial Order Scalogram Analysis)」「最小空間分析 (Smallest Space Analysis)」「中央値回帰分析 (Median Regression Analysis)」——この最後の技法は Guttman が2変数間の関係を描写する簡便法として用いたものであるが、その解説はまったくなされていない。筆者はこの技法にこのような命名を行なうとともに、専門家の協力にもとづく

コンピュータ・プログラムの作成を行なった——などの開発。

(3) ファセット・セオリー (Facet Theory) : 質問紙調査にもとづく人間行動の諸法則——第1の法則、第2の法則、多調回帰の法則——などとその理論的根拠 (rationale) の定式化、がそれである。

ここで、ファセット・アプローチについて、さらに詳細に解説する紙面の余裕はない。この点については、筆者による別の文献を参照されたい [真鍋、1993、Manabe, 2001、真鍋、2002]。

さて、ファセット・デザインの考え方からするならば、調査票で用いられる質問項目は、まず open-ended question と closed-ended question に区別される。Guttman は、後者をさらに range question と cafeteria question に区別し、質問紙調査にもとづく人間行動の諸法則の定式化という視座からするならば、range question——「賛成—反対」「好き—嫌い」「満足—不満足」などの一次元的 (unidimensional) な選択肢を提示する形式——こそが有効であるとする。では、cafeteria question とは、具体的にどのようなものかというところ、たとえば余暇の過ごし方についての質問で、「仕事の疲れを癒す」「自己実現をはかる」「好きなことをして楽しむ」「家族と過ごす」などの多次元的 (multidimensional) な選択肢を提示するという形式がそれである。そして、このような range question は、その種類——その回答の選択肢の形——にもとづいて、さらにいくつかのタイプに分けられる。これが、ここにいう、質問諸項目を質問——そして同時に、回答の選択肢——の「形式」によって分類する方法である。すでに述べたように、ここでは「日本人の独自の宗教意識を捉える質問諸項目」をデータ分析のために取りあげるの、それらを具体的な事例として用いて、range の種類にもとづく質問諸項目の分類の仕方を示すことにする。それは、質問諸項目を以下のような4種類に分類する方法である。

(1) 宗教的な行動をしているかどうかに関する諸項目 (回答の選択肢は「よくする」「ときどきする」「たまにする」「しない」の4つ)。

(2) 神仏、霊魂、輪廻などが存在すると思うかどうかに関する諸項目 (回答の選択肢は「あ

る」「あるような気がする」「ないような気がする」「ない」の4つ)。

(3) 宗教的な信念・感情・意識に関する諸項目 (回答の選択肢は「そう思う」「ややそう思う」「どちらともいえない」「あまりそう思わない」「そう思わない」の5つ)。

(4) 宗教のはたらき・機能・性質に関する諸項目 (回答の選択肢は「そう思う」「ややそう思う」「どちらともいえない」「あまりそう思わない」「そう思わない」の5つ)。

ここで、回答の選択肢の「形式」という点からするならば、(1) と (2) (3) (4) には大きな違いがあることがわかる。それは、(1) の場合の回答のカテゴリは一方の端の「しない」のところから0ポイントがくる形であるのに対して、(3) と (4) の場合は0ポイントは「どちらともいえない」というところにあり、その0ポイントを中心に両端 (上下あるいは左右) に positive な方向 (「そう思う」「ややそう思う」) と negative な方向 (「そう思わない」「あまりそう思わない」) がセットされる形となっているということである。そして (2) の場合はいわば (3) と (4) の変形で、0ポイントを示す選択肢が省略されているタイプということが出来る。

さて、以上においては、今回の調査の質問諸項目を、まずその「内容」にもとづいて3種類に分類するとともに、つぎにそのようにして分類された、2番めの「日本人の独自の宗教意識を捉える諸項目」を、その「形式」というところに焦点を合わせて、4種類に分類した。では、データ分析に先立って、なぜこのような分類作業をしておくのかということ、Guttman とその研究グループがファセット・セオリーにもとづいて蓄積してきた知見 (cumulative findings) からするならば、「質問諸項目間の関係の大きさは、質問の『内容』だけでなく、質問の『形式』によっても影響を受ける」——上述の例でいえば、0ポイントが response scale の『中間』のところにくるいわゆる attitudes の質問と、0ポイントが response scale の一方の端にくるいわゆる involvement の質問項目との関係は、その質問項目の「内容」にかかわらず、しばしば monotone (linear) ではなく、polytone の形になることがわかっており、

Guttman はこれを「多調回帰の法則」と呼んだ——ということがわかっているからにはほかならない。社会科学の領域におけるデータ分析では、これまで、そして現在でも、多くの場合、質問項目の「内容」に即して項目間の関係についての分析のデザインが準備され、質問の「形式」が考慮されることは少ない。このように、データ分析の「事前」にファセット・デザイン (Facet Design) と呼ばれる準備作業を十分に整えておくのがファセット・アナリシスの特徴といえるのであり、この点がデータ分析の「事後」に結果の意味づけを試みることの多い「因子分析 (Factor Analysis)」との大きな相違点ということができよう。

今回の調査の内容ということに関しては、以上のような質問諸項目の分類ということ以外に、どうしても述べておかなければならないことがある。それは、「日本人の独自の宗教意識を捉える諸項目」をどのように作成したかということである。いいかえれば、日本人に固有と考えられる religiosity についての conceptualization と operationalization の試みということができる。この点については、これまでさまざまな文献において、じつに多くのことが語られてきた。しかし、その多くが、いわばその文献の筆者の「洞察力・観察力・イマジネーション」にもとづく記述——もちろん、社会学にとっては、それはまさに研究の出発点であるとともに、ある意味では到達点ともいうべきもので、きわめて重要であることはいうまでもない——にとどまり、それを質問紙法 (questionnaire method) にもとづく大量観察的なサンプル・サーベイによって実証的に検証するという試みは必ずしも多くはない。その多くはない文献のなかから、ここでは以下のものをあげておきたい。

NHK 放送世論調査所 (1984年) 『日本人の宗教意識』東京：日本放送出版協会

金児暁嗣 (1997年) 『日本人の宗教性——オカゲとタタリの社会心理学——』東京：新曜社

石井研士 (2007年) 『データブック 現代日本人の宗教 [増補改訂版]』東京：新曜社

井上順孝 (2003年) 『若者における変わる宗教

意識と変わらぬ宗教意識』東京：國學院大学

西脇 良 (2004年) 『日本人の宗教的自然観』京都：ミネルヴァ書房

林 文 (2007年) 『身近な生活における伝統文化意識に関する調査——2006年横浜市4区郵送調査報告書——』東京：東洋英和女学院大学

ロバート・キサラ、永井美紀子、山田真茂留 (2007年) 『信頼社会のゆくえ——価値観調査に見る日本人の自画像——』東京：ハーベスト社

いうまでもなく、ここでは日本人の religiosity の測定に取りくんだ実証的研究を網羅的に取りあげたわけではない。そうではなくて、はじめの問題関心であった日本においても「宗教意識は人びとの価値・信念・態度と結びついている」という命題を検証するために、日本人の religiosity についての conceptualization と operationalization に端緒を開くことができれば十分であった。そのために、ここでは筆者らの共同研究のグループのメンバーの手近にある文献を用いることにした。いずれにしても、こうして、これらの文献を踏まえて、調査票の設計がなされたのである。

IV. データ分析

1. 回答の分布の型

質問紙調査のデータ分析の第1段階は、それぞれの質問項目ごとの「単純集計表 (simple tabulations=marginal frequency distributions)」に示された回答の分布が、(1)「単一最頻 (single-modal) 型」であるか、それとも (2)「複数最頻 (multi-modal) 型」であるかの検討であろう。そして、前者の (1) の型の場合、それが、①最初の選択肢のところで回答者のパーセンテージが最も高く、回答の選択肢の順にそのパーセンテージが直線的に低くなっていく「linear 減少型」、②回答の選択肢の「中間 (in the middle)」のところのパーセンテージが最も高く、そこから両極に離れていくにしたがってパーセンテージが低くなっていく「ベル型」、③逆に、回答の選択肢の

順にそのパーセンテージが直線的に高くなっていく「linear 増加型」、のいずれの型となっているかの検討、さらに後者の(2)の型の場合、それが、①回答の選択肢の「両極」でそのパーセンテージが高く、「中間」のところではそれが低い「U (あるいはV) 字型」、②その変形型で回答の選択肢が4カテゴリの場合、2番目と1つ置いて最後のカテゴリでパーセンテージが高く、1番目と3番目でそれが低い「N字型」、のいずれの型となっているかの検討、が必要となってくるであろう。

ここでデータ分析に取りあげる質問諸項目は、日本人の独自の宗教意識を捉える諸項目であり、それは57項目となる。この57項目が、それぞれの回答の分布の型に分類されるかを示したのが、つぎの表1である。

表1 回答の分布の型の頻度

分布の型	ケース数	%
(1) の① linear 減少型	8	14.0
(1) の② ベル型	40	70.1
(1) の③ linear 増加型	7	12.3
(2) の① U (V) 字型	1	1.8
(2) の② N字型	1	1.8
計	57	100.0

以上の結果から、ここで分析に取りあげる質問諸項目のほとんどが、「単一最頻型」であり、それも「ベル型」の分布であることがわかる。このことから、以下の分析を進めるにあたりとくに問題はないものといえよう。

2. 「相関マトリックス」(correlation matrix)

——質問諸項目間の関係の分析——

ここでのデータ分析の基本的な考え方は、比喩的にいえば、いきなり「木を見る」のではなく、まず「森を見る」ところから始めるというものである。一般に、質問紙調査のデータ分析においては、まず広く全体的なデータの構造や関連を把握したうえで、つぎにデータの特定の側面に焦点を絞って分析を深めていくという行き方が常套手段となっている。筆者は、この前者の側面を「森を

見る」、後者の側面を「木を見る」と呼んでいる。では、このような「森を見る」ための技法として、どのようなものが利用できるかという点、ここではまず「相関マトリックス」の検討から始める。いうまでもなく、「相関マトリックス」は、 n 個の項目の相互間のすべての単純相関係数を $n \times n$ のマトリックス(行列)の形で示したものである。データ分析に取りあげる質問諸項目は57項目となっているので、こうして作成した「相関マトリックス」は縦1m、横2mにも及ぶ大きなサイズのものとなった。そのため、その相関マトリックスを、そのままの形で、ここに掲載することはできない。そこで、そこから読み取ることのできる知見とそれをめぐる考察について箇条書き的に記しておくにとどめる。

(1) ここで扱う57の諸項目を、①宗教的な行動をしているかどうかに関する諸項目、②神仏、靈魂、輪廻などが存在するかどうかに関する諸項目、③宗教的な信念・感情・意識に関する諸項目、④宗教のはたらき、機能、性質に関する諸項目、に分類したことはすでに述べた。しかし、④については、これらの質問項目は宗教のはたらき、機能、性質がいわゆる statements あるいは propositions の形で示されていて、回答者がそれぞれについて、「そう思うか」、それとも「そう思わないか」を回答するという形式になっている。そこで、このような statements あるいは propositions の内容が「肯定的 (positive)」なものであるか、それとも「否定的 (negative)」なものであるかが問われることになる。こうして④の質問項目を「肯定的な statements/propositions」と「否定的な statement/propositions」の2つ分けるとするならば、全体で5種類の質問項目群が区別されることになる。ここでは、このような質問諸項目の分類を踏まえて、「相関マトリックス」の検討を進める。

さて、一般に「相関マトリックス」の検討はつぎの2つの側面から行なわれる。(i) 個々の相関係数の「正負の符号 (sign)」の検討、(ii) 個々の相関係数の「数値の大小 (size)」の検討、がそれである。このように視座を定めて、「相関マトリックス」を検討していくならば、全体として上述のような質問諸項目群「問」の相関

係数とくらべて、質問諸項目群「内」の相関係数のほうで、(i) その「符号」はプラスのものが相対的に多く、また(ii) その「数値」は相対的に大きいものが多い、ということがわかる。このことから、以下のデータ分析においては、このような質問諸項目群ごとに advanced analysis を進めていくことの可能性が示唆されるのである。

(2) つぎに、以上のような質問諸項目の分類というようなアイデアから離れて、全体として「相関マトリックス」のどのあたりで相関係数の数値が小さなものとなっているか——相関係数の大小の判断については、決まった考え方があるわけではない。ここでは、それが0.1未満の場合に「その数値は小さい」とする。この基準からするならば、マイナスの「符号」のついている相関係数のほとんどで、その「数値」は小さなものとなっている——を見ていけば、それが「Q12 b. おみくじを引くかどうか」「Q19f. UFOはあると思うかどうか」「Q21f. 神様といっても仏様といっても同じであると思うかどうか」「Q21g. この世のしあわせの方が来世の救いよりも大切であると思うかどうか」の4項目とほかの質問項目との関係のところにおいてであることがわかる。このことは、以下の advanced analysis においては、これらの4項目は削除しておいたほうが、その分析はうまくいくということを示唆しているといえるかもしれない。

(3) 今回の調査票では日本人の religiosity について、2つの key variables を準備した。1つはQ7の「あなたは、なにか宗教を信仰していますか」という質問項目であり、もう1つはQ24の「宗教的な心というものは、大切だと思いますか」という質問項目である。いうまでもなく、これらの2つの質問項目を準備したのは、統計数理研究所の『日本人の国民性』に関する研究成果を踏まえてのことである。それは、「日本人は『なにか宗教を信仰しているか』と尋ねられると6割の人びとが『ない』と答えるものの、同じく6～7割の人びとが『宗教的な心は大切か』と聞かれると、それに対しては『大切だと思う』と答える」という知見であり[石井研士、2007]、まさにこの点に日本人の religiosity の特徴が見られると考えられる。確かに、この点は柳川啓一の「信

仰なき宗教」という指摘と軌を一にするものといえる[柳川啓一、1989]。このような視座に立って、Q7の「なにか宗教を信仰しているか」と、Q24の「宗教的な心というものは、大切だと思いますか」の2つの質問項目と、それ以外の質問諸項目との関係を示した「相関係数」をくらべてみるならば、後者のほうでその相関係数の数値がより大きいものとなっていることが多いことがわかる。このことから、確かに日本人の religiosity の中心には、「宗教的な心は大切」という気持ちが位置していることが示唆されるのである。

3. 最小空間分析 (Smallest Space Analysis)

以上においては、「相関マトリックス」の個々の相関係数の「符号」と「数値」の比較にもとづいて、そこに見られる傾向といったものを読み取ることにつとめた。ところが、このような分析作業にはつぎのような問題が残される。それは、この分析作業では、「相関マトリックス」に示された個々の相関係数が1対の変数間の関係の測度 (measurement) にとどまるものであるかぎり、それぞれの傾向の読み取りがどこまでも個々に独立したものに終わらざるをえないということである。つまり、再び筆者の用語を用いるならば、相変わらず「森」が見えてこないのである。こうして、これら個々の独立した傾向を背後で関連づけていると考えられる「基底的な側面」を抽出するデータ分析の技法が要請されることになる。このような要請にこたえる技法の1つにL. Guttmanの「最小空間分析」がある。

最小空間分析は、多次元尺度構成法 (multidimensional scaling) の系列に属し、「相関マトリックス」に示されたn個の項目間の関係をm次元 ($m < n$) の空間におけるn個の点の距離の大小によって示す方法である。相関が高くなるほど距離は小さくなり、逆に相関が低くなるほど距離は大きくなる。通常は諸項目間の関係を視覚的に描写するために2次元 (平面) かあるいは3次元 (立体) の空間布置が用いられる。アウトプットの座標軸には固有の意味はなく、この点が「因子分析」と異なるところである。

以上から、「最小空間分析」はデータの全体的な構造や関連を視覚的に描き出すのにきわめて適

した技法であることがわかる。ここでは、「日本人の独自の宗教意識」の分析にこの技法を援用することの意義について、もう少し考えておきたい。筆者は、かねてから社会科学の領域の実証的研究 (empirical research) における「プロセス提示型論文 (海野道郎の用語)」の重要性を主張してきたが、このような線上で、今回の「価値観と宗教意識に関する調査」での質問紙設計に関する基本的な考え方とともに、その具体的なプロセスについて説明してきた。それは、調査に先立って、日本人の religiosity に関する文献の渉獵が行なわれ、それを踏まえて調査票の設計がなされたということである。いいかえれば、それは、日本人の religiosity をめぐる conceptualization と operationalization の試みということもできる。ところが、このような作業は、その性格上、いわば日本人の religiosity のさまざまな側面にサーチライト (T. Parsons の用語) を当ててみたものであり、それだけではそれぞれの側面がつながって構成される「全体像」——つまり日本人の religiosity の全体像——は見えてこない。そもそも、これまでの先行研究において、そのような全体像を実証的に描き出すという試みそのものがなされていない。

こうして、ここでのデータ分析のねらいはというと、それは個々のバラバラな質問文の形に解きほぐされた「日本人の宗教意識の諸相」を、それぞれの質問文の相互の関係の構造というところに焦点を合わせて、その全体像を再構成するという試みということになる。そしてこのような「探索的」で「問題発見的」な課題に応えるデータ分析法の1つが、「最小空間分析」にほかならないのである。

さて、以下においては、日本人の独自の宗教意識を捉える56の質問項目を、データ分析のために取りあげるが、その分析の手順は、まずこれらは56項目をそれぞれの質問とその回答の「形式」にもとづいて4つに分類した、その4つの質問項目群ごとに「最小空間分析」を試みた上で、つぎにこうして空間布置されたそれぞれの項目についての「単純集計」の結果を検討する、というものである。

(1) 宗教的な行動に関する諸項目 (10項目) の最小空間分析

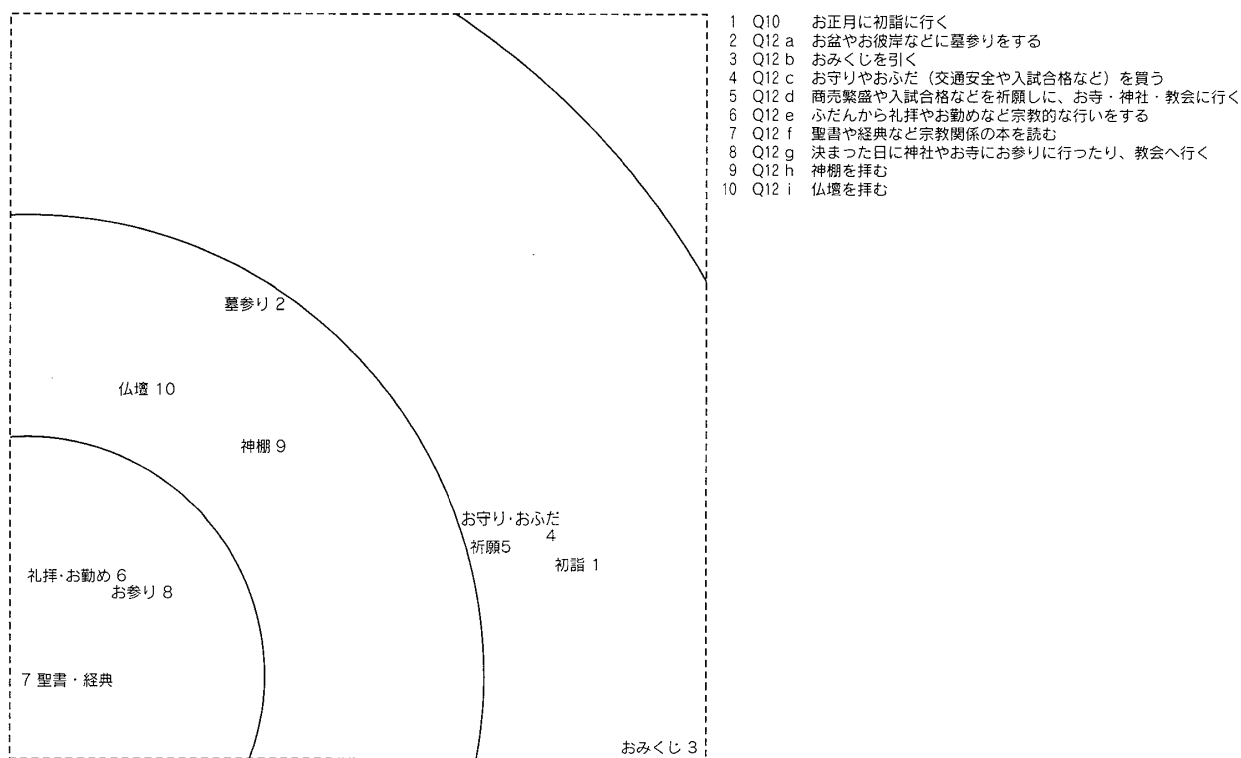
上述の「[相関マトリックス] から Q10、Q12a～i の10項目の相互間の関係を示した部分を取り出し、それをデータ分析のコンピュータ・ソフトウェアのパッケージ HUDAP (Hebrew University Data Analysis Package) を用いて分析することによって、つぎのような2次元の SSA マップ (空間布置) が得られた (図1)。コンピュータのアウトプットは、2次元の空間に、それぞれの変数 (質問項目) の位置を示した数字が印字されているものであり、この SSA マップに描かれた4つの同心円 (concentric circle) は、筆者が Guttman のファセット・セオリーの「経験法則 (empirical law)」を踏まえて、これら10項目の空間布置にある意味づけ (解釈) を試みた結果である。それがどのような解釈かという、これら10項目の空間布置は、7 (Q12f) の「聖書や経典などの宗教関係の本を読む」を中心にして、それとの関係——相関関係——の大きさに応じて、近くの——つまり相関関係が大きい——同心円内あるいは遠くの——つまり相関係数が小さい——同心円内にそれぞれプロットされる形となっているというものである。いうまでもなく、ここでの空間分割 (space partition) が、「楕円」ではなく、「円」によって描かれているのは、後者の場合はそれが原点からの等距離を示すものであるからにほかならない。

こうして「聖書・経典」を取り囲む第1番目の同心円は、それを中心としてそれ以外の諸項目の空間布置を検討するための出発点という位置づけがなされる。

つぎに、第2番目の同心円は、6 (Q12e) の「ふだんから礼拝やお勤めなど宗教的な行いをする」と8 (Q12g) の「決まった日に神社やお寺にお参りに行ったり、教会へ行く」の2項目を含むもので、「聖書・経典」との相関係数の大きさは前者で0.54、後者で0.41——いずれも1%水準で統計的に有意——となっており、これらは「かなり高い相関」を示しているといえる。

さらに、第3番目の同心円は、10 (Q12i) の「仏壇を拜む」(0.21)、9 (Q12h) の「神棚を拜む」(0.19) ——いずれも1%水準で統計的に有

図1 宗教的な行動に関する諸項目の最小空間分析



意——、2 (Q12a) の「お盆やお彼岸などに墓参りをする」(0.08) ——5%水準で統計的に有意——の3項目を含み、これらは「ある程度の相関」を示すものとなっている。

最後に、その外側に第4番目の同心円がくくるが、そこには「聖書・経典」とは「きわめて低い相関」を示した5 (Q12d) の「商売繁盛や入試合格などを祈願しにお寺・神社・教会に行く」(0.03)、4 (Q12c) の「お守りやおふだ（交通安全や入試合格など）を買う」(0.02)、1 (Q10) の「お正月に初詣に行く」(-0.01)、3 (Q12b) の「おみくじを引く」(-0.05) が含まれる——これらはいずれも統計的に有意でない——。

以上のようなSSAマップの読み取りから、少なくともつぎのような2つの点が指摘されるであろう。

①ここで取りあげた宗教行動に関する10の項目が、以上に述べた同心円によって空間分割される3つの領域にグループ化されながら散らばっていることがわかる。(i) 礼拝・お勤め・聖書・経典・お参りのグループ、(ii) 墓参り・神棚・仏壇のグループ、(iii) 初詣・おみくじ・お守り・おふだ・祈願のグループ、の3つのグループがそ

れである。

いうまでもなく、このような諸項目の分類はGuttmanのいう「近接仮説 (contiguity hypothesis)」にもとづいている。そもそも質問紙調査というものは、その質問紙(調査票)で用いられる「言葉」の意味をめぐる実証的な測定技法であり、したがってそのデータ分析はまさに調査者と被調査者の両方の側における「意味空間」の探究ということになる。そこで、Guttmanの考え方からするならば、調査で用いられる質問諸項目の意味内容が近い場合には、それら諸項目のSSAマップにおける位置(空間的距離)も近いものとなる。じつは、ファセット・セオリーは、このような「意味空間」と「意味連関」についての概念装置と実証を踏まえて構築されてきたものである。では、以上に分類——因みに、「量的な次元を数量で表すことを測定という。非量的次元の場合、測定に相当するのは分類である」とされている[安田、1960]——された、それぞれの諸項目群ごとの「意味」はどこにあるといえるのだろうか。ここでは、それぞれの諸項目に共通する性格に注目して(i)を「信仰表出的行動」、(ii)を「伝統・慣習的行動」、(iii)を「イベント的行動」と呼ぶことにしたい。

さて、このような知見は、日本人の religiosity の観察——ここでは「質問紙調査」という方法による観察——と分析にとって、きわめて示唆的であるといわなければならない。それは、人びとの religiosity の国際比較研究においては、いわゆる「宗教的な行動」について、このようないくつかの種類の宗教行動が必ずしも十分に区別されてこなかった——いいかえれば「次元の細分化」がなされてこなかった——からである。

たとえば、このような領域における調査研究として最も注目されるのは、「ヨーロッパ価値観調査」に合わせて日本で全国調査として実施された「日本人の価値観調査」であろう [キサラ、永井、山田、2007]。ところが、この調査では、このような宗教行動の種類が区別されていない。それにもかかわらず、そこから「日本の場合、信仰をもっている人の割合が低いにもかかわらず、宗教行事への参加度は高い」という知見を導き出し、「日本では宗教行事が慣習化されている」と解釈している。もう1つの例は、「国際社会調査プログラム (宗教モジュール調査)」で、そこでも「日本人の宗教行動は社会的な習慣として定着している」とされている [小野寺、1999]。この記述については、R. Merton のいう「事後解釈」 [Merton、1957=1961] という問題も指摘できるが、それはしばらくおくとしても、前者の場合と同様にさまざまな宗教行動の種類を区別していないという問題が残される。

こうして、今回の質問紙調査をとおして、日本人の religiosity の分析においては、日本人の宗教行動を「十把ひとからげ」的に取り扱うことの問題が浮き彫りとなってきたといえるのである。繰り返しになるが、ここで3種類に分けられた宗教行動、つまり、(i)「礼拝・お勤め・聖書・経典・お参り」——「信仰的表出行動」——、(ii)「仏壇・神棚・墓参り」——「慣習的行動」——、(iii)「初詣・おみくじ・お守り・おふだ・祈願」——「イベント的行動」——は、性格的にもかなり違ったものではあり、その結果、お互いの相関関係も小さなものにとどまっているのである。

② Guttman は、上述のような SSA マップの形、つまり共通の原点——ここでは「聖書・経典」という項目 (変数) がこれに当たる——のまわりに

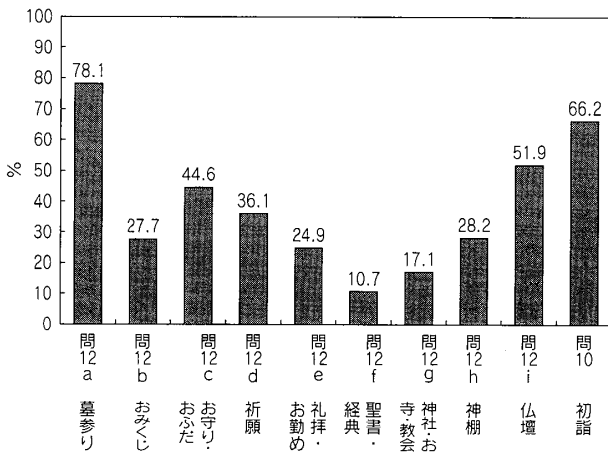
いくつかの同心円が描かれるという形を「シンプレックス (simplex)」と呼び、このようにデータ分析に取りあげた諸項目間の関係が「シンプレックス」の性質を示している場合には、それらの諸項目を「尺度分析 (scale analysis: Guttman scale)」にかけるならば、それらは「1次元尺度 (unidimensional scale)」を構成するという。

そうだとするならば、ここでの宗教行動の諸項目も、一方の「聖書・経典」から「お守り・おみくじ・初詣」に到る「一次元尺度」を構成しているものと考えられる。いうまでもなく、このような「一次元尺度」は、ある1つの特性を線形関係の形で示している。では、ここでの宗教行動の諸項目における「次元」の特性はどのようなものであろうか。ごく一般的に言えば、それは信仰心の「深さ」あるいは「強さ」といえるかもしれない。しかし、筆者は筆者自身の「洞察・経験・イメージネーション」にもとづいて、それを「信仰心の自覚 (self-awareness of religiosity)」というように考えておきたい。つまり、「聖書・経典」においてその自覚の意識が高く、「お守り・おみくじ・初詣」ではそれが低いということである。こうして、「お守り・おみくじ・初詣」では、人びとはことさらそのような行動が「宗教行動」であるとは意識 (あるいは認識) していないにもかかわらず、その心のどこか深いところで、いわば無意識の「信仰心」をもっているというのが筆者の仮説である。(じつはこのような「仮説」は、これらの諸項目と、以下の分析で取り上げる「神仏・霊魂・輪廻などの存在に関する諸項目」「宗教的な信念・感情・意識に関する諸項目」「宗教のはたらき・機能・性質に関する諸項目」との相関関係の大きさの検討をとおして検証されるものである。)

さて、以上のような宗教的行動に関する諸項目の最小空間分析の結果を踏まえて、つぎにこれら質問諸項目についての「単純集計」の結果 (図2) に目を移すならば、(i) 信仰表出的行動、(ii) 伝統的・慣習的行動、(iii) イベント的行動、の3種類の行動をくらべて、そのような行動を「する」(「よくする」+「時々する」) という回答の割合が、信仰表出的行動のグループの諸項目で相対的に低くなっていることがわかる。多くの

図2 宗教的な行動に関する諸項目の単純集計結果

— 問12「する」(「よくする」+「時々する」)、
問10「行く」(「いつも行く」+「行くことが多い」)の% —



人びとが「する」と答えるのは「墓参り」78%と「初詣」66%であり、それに「仏壇」52%と「お守り」45%がつづくが、それ以外の諸項目は人びとのほぼ1/3か、それ以下でしかない。これらの結果を見るかぎり、確かに「信仰的表出的行動」の割合は低く、この点から日本人の religiosity を「信仰なき宗教」と特徴づけることもうなずける。しかし、この傾向が日本に固有な現象であるかどうかという点については、疑問が残る。さらなる検討が必要であるといえよう。

(2) 神仏・霊魂・輪廻などの存在に関する諸項目(6項目)の最小空間分析

「宗教的な行動に関する諸項目」の場合と同様の分析を進めた。ただ、ここでの結果(図3)からするならば、UFOのケース(ほぼ0.3の値)を除いて、諸項目間の相関係数のサイズは前者の場合とくらべて、全体に「かなり大きい(0.5以上の値)」ものとなっている(いずれも1%水準で統計的に有意)。6項目のなかで、UFOだけがやや異質の項目であるといわなければならない——人びとの心のなかで「神や仏」「霊魂・輪廻・守護霊など」と「UFO」は別の意味空間を構成していると考えられる——が、残りの5項目については、これらを別の同心円を描くことによってさらに分類する必要はないかもしれない。しかし、他方で、これらの「存在」に関する諸項目と、つぎに取りあげる「宗教的な信念・感情・意識に関する諸項目」との相関係数のサイズを検討していくならば、これら5項目のなかの「神や仏」と「霊魂・輪廻・死後の世界・守護霊」では相違点も見られる。つまり、そのような相関係数の値が、多くのケースについて、後者よりも前者で大きいということである。このような点からするならば、図3のような空間分割にも意味があるといわな

図3 神仏・霊魂・輪廻などの存在に関する諸項目の最小空間分析

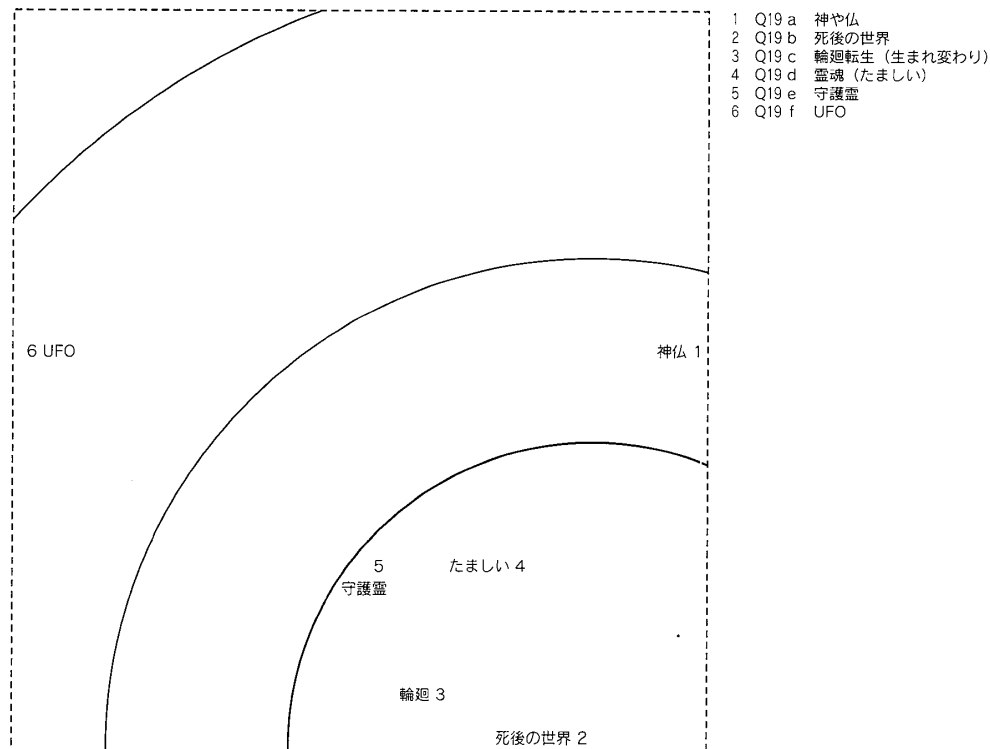
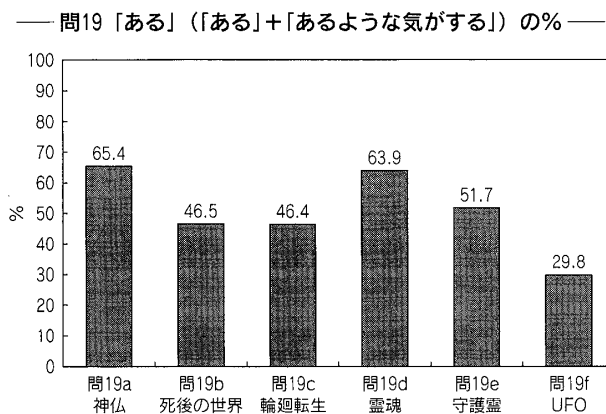


図4 神仏・靈魂・輪廻などの存在に関する諸項目の単純集計結果



ればならないのである。

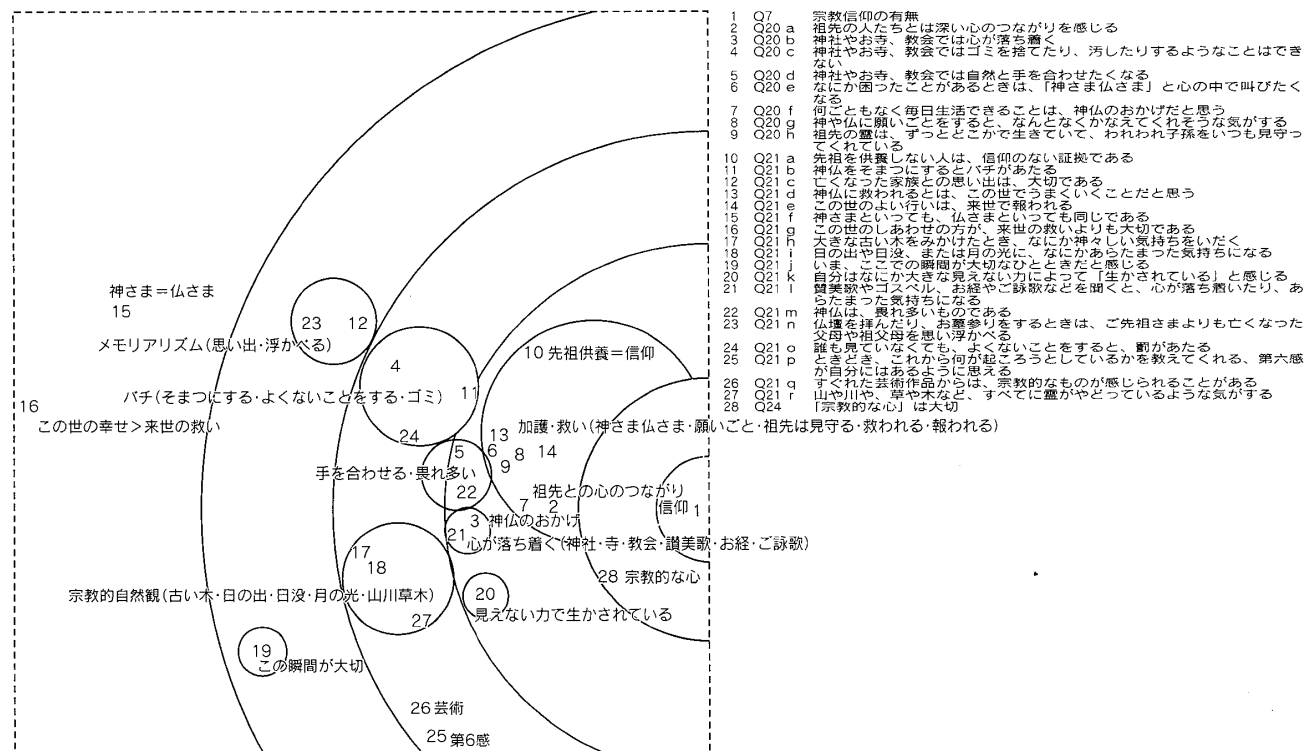
このような結果を踏まえて、つぎに「単純集計」の結果(図4)に目を向けるならば、同じくUFOの場合を除いて、「ある(『ある』+『あるような気がする』)」と答える人の割合がどの項目についても46%以上、とくに「神や仏」、「靈魂」ではほぼ65%にも及ぶものとなっていることがわかる。これが、後で取りあげる「宗教的な心が大切」という回答とほぼ同じ割合であり、「信仰がある」という32%の回答の2倍近くにもなっていることはきわめて興味深い。

(3) 宗教的な信念・感情・意識に関する諸項目(28項目)の最小空間分析

ここでのSSAマップ(図5)は、これまでのものとくらべると、かなり複雑な様相を呈しているように見える。それは28項目という圧倒的に多くの項目を1度に分析に取りあげているからにはほかならない。しかし、じつはこのマップも決してそれほど複雑なものではなく、その全体的な構造はこれまでのマップと変わるものではない。つまり、「信仰をもっている」とする項目を中心に、それ以外の27の諸項目がこの項目との相関関係(係数)の大きさに応じて、4つの同心円によって分割される空間内にそれぞれ布置されているということである。いうまでもなく、それぞれの距離の近い項目どうしはその「意味内容」が近いものである——すでに述べたように、これが「近接仮説」と呼ばれるものの具体的な内容である——と考えられる。つぎに、4つの同心円の内側から順番に、それぞれの空間内に布置された諸項目の内容について検討していきたい。

まず、1(Q7)の「信仰をもっている」とする項目から始めて、1番目の同心円内には28(Q24)の「宗教的な心は大切」が位置しており、この両者の相関係数の値は0.30以上——1%水準で

図5 宗教的な信念・感情・意識に関する諸項目の最小空間分析



統計的に有意——となっており、その相関は「かなり高い」ものであるといえる。しかし、「かなり高い」ものではあるが、「非常に高い」ものであるとはいえない。やはり、「信仰をもっている」という意識の側面と「宗教的な心は大切」という意識の側面とは、別の次元として区別しておいたほうがよさそうである。繰り返しになるが、相関係数の値がどのくらいであれば、2つの項目は同じ次元を構成し、どのくらいであれば別の次元を構成すると考えるかについては、必ずしも確定した考え方があられるわけではない。それは、「科学的な判定」の問題であるよりも、むしろ「理論的な目標」の問題であるというべきであろう。ここでは、「信仰をもっている」という「信仰表出的な意識」の側面と、「宗教的な心が大切」という「素朴な宗教的感情」（林文の用語）の側面とを概念的に区別することから、日本人に独自の religiosity の諸相の解明が進展するであろうという「理論的な目標」を掲げてきたが、データ分析をとおして、このようなアイデアを検証していく操作的方法に端緒を開くことができたと考えるのである。

つぎに、2番目の同心円内には今回の分析では最も多い13項目が布置されている。これらの諸項目は「信仰をもっている」の項目との相関係数の値が0.20以上——1%水準で統計的に有意——となっており、「ある程度の高さ」の相関であるといえる。これ諸項目は、それぞれの近接の度合いにしたがって、さらにつぎの4つのグループに分けることができるであろう。

- i) 「加護・救い・先祖」のグループ
 - 6 (Q20e) 「神さま仏さま」と叫ぶ
 - 7 (Q20f) 神仏のおかげ
 - 8 (Q20g) 願いごとはかなえてくれる
 - 13 (Q21d) この世で救われる
 - 14 (Q21e) 来世で報われる
 - 2 (Q20a) 祖先との心のつながり
 - 9 (Q20h) 祖先が見守ってくれる
 - 10 (Q21a) 先祖供養
- ii) 「畏れ・手を合わせる」のグループ
 - 5 (Q20d) 神社・寺・教会で自然と手を合わせる

- 22 (Q21m) 神仏は畏れ多い
- iii) 「心の落ち着き・あらたまった気持ち」のグループ
 - 3 (Q20b) 神社・寺・教会
 - 21 (Q21l) 賛美歌・ゴスペル・お経・ご詠歌
- iv) 「生かされている」のグループ
 - 20 (Q21k) 大きな見えない力で生かされている

ここでの SSA マップでは、これらのグループを、「信仰をもっている」を中心（原点）とする4つの同心円とは別の円を描くことで示している。すでに述べたように、4つの同心円は Guttman のファセット・セオリーの「経験法則」を踏まえて、ここで分析に取りあげた全部で28項目の空間布置に一定の意味づけ（解釈）を試みた結果である。しかし上の4つのグループを区別するための小さな円を描くという方法は筆者自身のものである。Guttman の考え方からするならば、これらのグループは「小さな円」よりも、むしろ「原点からの放射線」による空間分割にもとづいて描き出されるべきものであろう。しかし、筆者の考え方からするならば、技法は目的によって用途が決められるべきものである。いうまでもなく、Guttman のファセット・アナリシスが基本的に「仮説検証」という性格をもっているのに対して、筆者のここでのアイデアはむしろ「探索的な試み」という性格づけがなされる。Guttman の場合は、このような放射線を描く仕方は分析に扱う諸変数間の関係の構造に関する Circumplex と呼ばれる理論を検証するための目的適合的な方法といえることができる。では、筆者の場合はどうかというと、そもそも筆者の問題関心は日本人の religiosity をめぐるある特定の仮説の検証にあるのではなく、その前の段階の日本人の宗教意識の諸相の全体像を捉えるということにある。このような問題関心からするならば、「近接仮説」にもとづいて、空間内で相対的に近くに散らばっている諸項目を小さな円で囲んでひとまとめにしてみるという仕方は、それなりに十分に意味のある方法といえることができるであろう。こうして、このようなグルーピングの手法によって、日本人の宗教意識では、「信仰・加護・救い」という宗教的

な感覚において、「神仏」と「先祖・祖先」は決して別々のものではなく、相互に交じり合っているということがはっきりと確認できるのである。この点は、これまでの日本人の religiosity をめぐるさまざまな文献で記述されてきた「日本人は亡くなった先祖は仏様になるという感覚をもっている」という命題を、大量観察的なサーベイ・リサーチによって実証的に検証した結果として注目されなければならない。

さらに3番目の同心円内には8項目が位置しており、「信仰をもっている」の項目との相関係数の値は0.10以上——25 (Q21p) 第六感のケースを除いて0.1%水準で統計的には有意——となり、「低い相関」とどまった。ここでも、これら8項目は、2番目の同心円内の諸項目の分類と同じ考え方にもとづいて、以下の3つのグループに分けられる。

i) 「バチ・罰」のグループ

- 4 (Q20c) 神社・寺・教会ではごみを捨てたり、汚したりできない
- 11 (Q21b) 神仏を粗末にするとバチがあたる
- 24 (Q21o) よくないことをすると罰があたる

ii) 「宗教的自然観」のグループ

- 17 (Q21h) 大きな古い木＝神々しい気持ち
- 18 (Q21i) 日の出・日没・月の光＝あらたまった気持ち
- 27 (Q21r) 山川草木＝霊が宿っている

iii) 「芸術・第六感」のグループ

- 26 (Q21q) 芸術作品から宗教的なものが感じられる
- 25 (Q21p) 第六感がある

ここでは、つぎの2点が注目される。

①「信仰をもっている」の項目との空間的距離によって表されるその「意味連関」の度合いという点からするならば、「信仰心 (の表出)」は、「バチ」や「宗教的自然観」よりも「加護・救い・応報」とより強く結びついている。

まず、前者の「バチ」という点については金見暁嗣『日本人の宗教性』(新曜社、1997年)を参

照しておくべきであろう。金見はこの研究書において日本人の宗教性を浮き彫りにするものとして「オカゲ」と「タタリ」という2つの鍵概念 (key concepts) を提案した。広く解釈すれば、「オカゲ」は「加護・救い・応報」に、「タタリ」は「バチ」に対応するものといえよう。そうだとするならば、今回のデータ分析をとおして現代人の信仰が「タタリ」よりも「オカゲ」とより強く結びついているという知見が導き出されたことは興味深い。この点は「punishment よりも reward」という現代人の意識傾向を示唆したものといえるかもしれない。

つぎに後者の「宗教的自然観」については、西脇良『日本人の宗教的自然観』(ミネルヴァ書房、2004年)が参考になる。じつは、ここでの宗教的自然観という概念そのもの、そしてその概念の操作化の産物としての質問項目も西脇のこの研究書に依拠している。こうして、ここでも現代人の意識のなかで「信仰心 (の表出)」と「宗教的自然観」とにはやや距離があるということがわかってきた。しかし、それは、「信仰」という項目を中心的な位置に据えて分析したからで、逆に「信仰」という言葉が前面に出てこない「宗教的自然観」の諸項目を中心に置いて分析するならば、当然、別のSSAマップが描かれることになる。ここでの知見は、このような日本人の religiosity を捉える視座の転換の必要性を示唆したものだといえるかもしれない。

②同じく、「信仰心 (の表出)」はバチがあたるという「機能的・規範的・事後的な側面」よりも自然に手を合わせたり、畏れを感じたりする「自然的・内発的・事前的な側面」とより強く結びついている。この点については、T. Parsonsをはじめとする社会学における Sanction の理論 [Parsons, 1954] が思い出されるのであり、ここでも前者の側面よりも後者の側面への選好を示す現代人の意識のあり様を見ることができるといえるかもしれない。そして、このような現代人の意識のあり様は、R. Inglehart のいういわゆる「ポスト・モダンナイゼーションの価値観」 [Inglehart, 1997] とも深く結びついているのかもしれない。

以上の2点は、いわば「探索的発見」ともいべきもので、これらについては今後さらに深い分

析と考察が加えられなければならない。

さらに、4番目の同心円内には3項目が含まれ、「信仰をもっている」との相関係数の値0.10以下——19 (Q21j)「いま、この瞬間が大切なひととき」は相関係数0.09で5%水準で統計的に有意であるが、12 (Q21c)「亡くなった家族との思い出は大切」は0.04、23 (Q21n)「お墓参りでは亡くなった人を思い浮かべる」は0.05で、いずれも統計的には有意でない——となり、「きわめて低い相関」という結果となった。これまでの日本人の宗教意識に関する文献では、「従来の日本人の先祖供養・先祖崇拜の意識が、先祖を思い出の記憶・なつかしさの対象としてのみ位置づけようとする意識へと変化してきている」ことが指摘され、そのような意識が「メモリアリズム」と呼ばれてきたが、確かに今回のデータ分析の結果からも、伝統的な「宗教的先祖観」と、ここでの「メモリアリズム」との間にはその意味空間に一定の距離があることがわかった。こうして現代人の意識のなかで「メモリアリズム」は「信仰」とは別の意味世界を構成しているといえるかもしれないのである。

最後に、4番目の同心円の外側にも2項目15 (Q21f)「神さま=仏さま」と16 (Q21g)「この世の幸せ>来世の救い」が見られるが、これらの項目も「信仰をもっている」とは「きわめて低い相関」にとどまり、しかもこれらは統計的に有意で

はなかった。

さて、以上において、宗教的な信念・感情・意識に関する諸項目の最小空間分析の結果について検討を加えてきた。ここでのSSAマップは、日本人の宗教意識の諸相を見事に描き出したものとして注目される。すでにたびたび述べたように、これまで日本人の固有の宗教意識についてはさまざまな記述がなされてきたが、このような形でその全体像を経験科学的に描き出す試みはなかった。このような諸項目の位置——別の言葉でいえば、それぞれの項目の相互の「意味連関」——について確認した上で、それぞれの「単純集計」の結果(図6、7)に目を向けるならば、「信仰をもって

図6 宗教的な信念・感情・意識に関する諸項目の単純集計結果(1)

——問7「信仰がある」、問9「親しみを感じる宗教がある」、問24「宗教的な心は大切」(「大切だと思う」+「まあ大切だと思う」)の%——

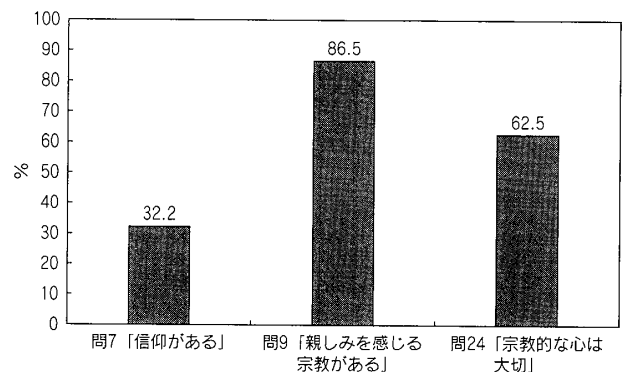
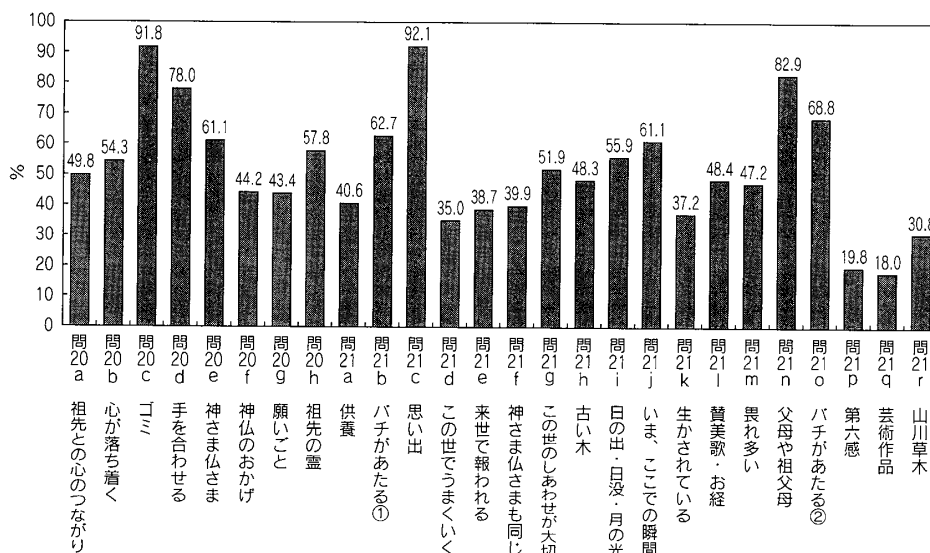


図7 宗教的な信念・感情・意識に関する諸項目の単純集計結果(2)

——問20、21「思う」(「そう思う」+「ややそう思う」)の%——



いる」はさすがにほぼ30%といったところにとどまるものの、「宗教的な心が大切」はほぼその倍の60%、「親しみを感じる宗教がある」や「メモリアリズム」や「バチ」「畏れ」に到っては80%~90%にもおよぶ人びとが「そう思う」としており、それ以外の多くの項目についても40%を超える回答者がそのような宗教意識に対して肯定的な回答をしていることがわかる。つまり、日本人の固有の宗教意識とされてきたものは、現在においても人びとの心のなかに生き続けているといわなければならないのである。これは、やはり筆者にとっては大きな驚きであった。

(4) 宗教のはたらき・機能・性質に関する諸項目 (13項目) の最小空間分析

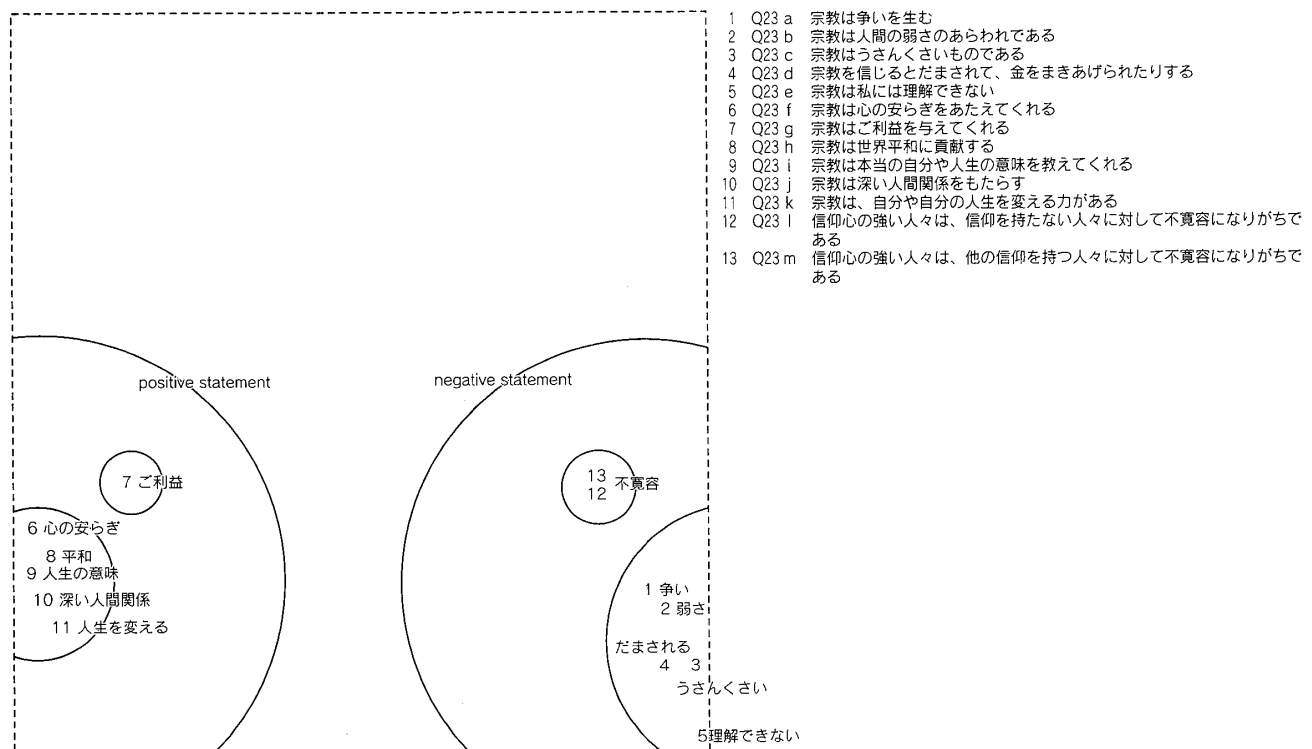
日本の宗教に関するこれまでの文献のなかでは、宗教のはたらき・機能・性質についても、さまざまな記述がなされてきている。これらの記述を命題 (proposition あるいは statement) の形に整理し、それらのいくつかを質問項目に構成したのが、ここでの13項目である。

さて、SSA マップ (図8) では、これら13の項目 (命題) が、宗教のはたらき・機能・性質についての「肯定的 (positive) な内容のもの」と

「否定的 (negative) な内容のもの」に大きく2分されていることがわかる。その上で、それぞれのグループ内の諸項目はさらにそれぞれ2つずつの小グループに分かれていることもわかる。つまり、「肯定的なステートメント」についていえば、「宗教はご利益を与えてくれる」「宗教は心の安らぎを与えてくれる」「平和に貢献する」「人生の意味を教えてくれる」「深い人間関係をもたらす」「人生を変える力がある」とやや離れたところに位置しており、また「否定的なステートメント」についていえば、「宗教は不寛容」の2項目は「宗教は争いを生む」「人間の弱さのあらわれ」「だまされる」「うさんくさい」「理解できない」とやや離れたところに位置しているということである。これらの点は、質問項目についての意味内容の検討からして十分に納得のいく知見であるといえよう。

つぎに、宗教のはたらき・機能・性質に関する13項目の単純集計の結果は、平均値 (mean values) の形で示した (図9)。その手順は以下のとおりである。これら質問文は、13のステートメントを提示し、調査対象者がそれぞれのステートメントに対して5つの選択肢のなかからいずれかの回答を選ぶという形式となっている。そこ

図8 宗教のはたらき・機能・性質に関する諸項目の最小空間分析



で、それらは選択肢の「そう思う」には+2点、「ややそう思う」には+1点、「どちらともいえない」には0点、「あまりそう思わない」には-1点、「そう思わない」には-2点を与え、それを調査対象者全員について加算し、平均値を算出し、それをグラフ上にプロットするというものである。

この結果からするならば、人びとは「ご利益」「世界平和」「深い人間関係」「人生を変える」では「そうと思わない」、「争い」「人間の弱さ」では「そう思う」、と回答する傾向があることが読み取れる。ここでは、人びとは「宗教のはたらき」に対してやや否定的であるように見える。しかし、人びとが「宗教のはたらき」について考える場合、それは既成の宗教団体を意識して回答しているのであって、すでに述べたような人びとの心のなかに生き続けている日本独自の宗教意識に思いを馳せながら回答したのではなからうか。そうだとするならば、「宗教」という言葉によって呼び起こされる意識と、日本独自の宗教意識との乖離 (discrepancy) というところこそが、現代の日本におけるきわめて特徴的な宗教現象といえるであろう。

4. 中央値回帰分析

(Median Regression Analysis)

ファセット・アナリシスの1つに筆者が「中央値回帰分析」と名づけた技法があることについては、すでに述べた。この技法は、2変数間の関係を視覚的に描写するためのいわば簡便法として考案されたものであるが、そこでの Guttman の基本的な考え方は重要である。それは、「ファセット・アナリシス」「ファセット・セオリー」とともに、いわば三位一体的に「ファセット・アプローチ」を構成する「ファセット・デザイン」の考え方を出発点とする。Guttman は調査票の質問文をその回答の選択肢のタイプ——range の種類——にもとづいて attitude, involvement, intelligence などに区別し、それらを調査票を用いて観察される人間行動の principal components (「主要素」あるいは数学的な表現をとるならば「主要素解」と呼んだ。そして、Guttman は、さまざまな調査事例をとおして、これら component 間の関係は——その質問文の具体的な内容にかかわらず——U字型、N字型、M字型などの多調回帰 (polytone regression) の関係となることを見出した。中央値回帰分析は、まさにこのような多調回帰の関係のパターンを描写する技法として考案されたのである。

図9 宗教のはたらき・機能・性質に関する諸項目の単純集計結果
—— 平均値 ——

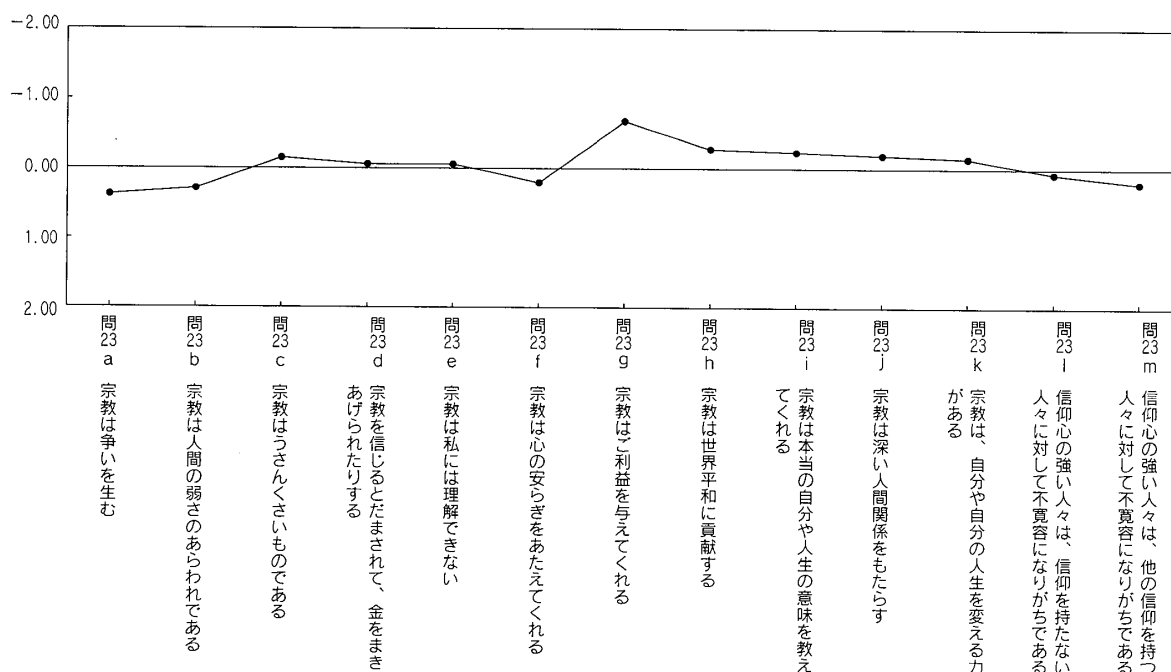
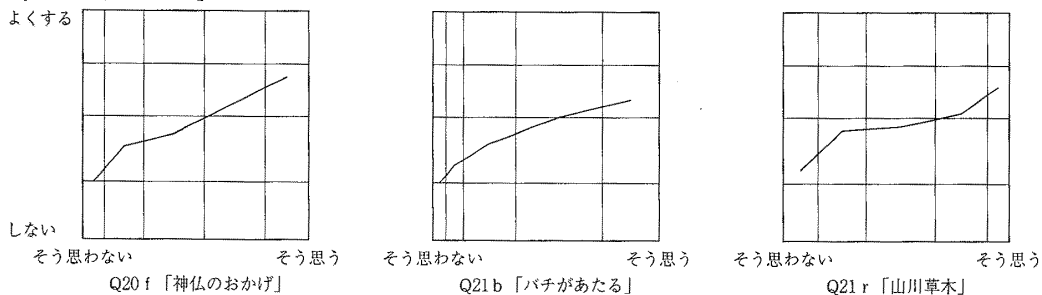


図10 「宗教的な行動」と「宗教的な信念・感情・意識」との関係
—— 中央値回帰分析 ——

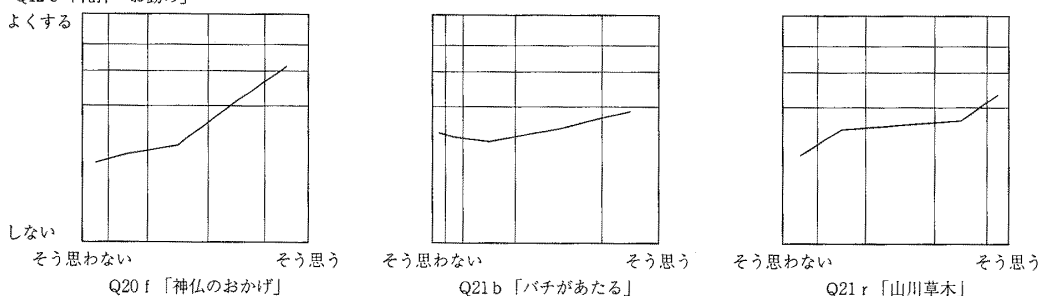
Q12c 「お守りやおふだ」と Q20 f 「神仏のおかげ」、Q21 b 「バチがあたる」、Q21 r 「山川草木」との関係

Q12c 「お守りやおふだ」



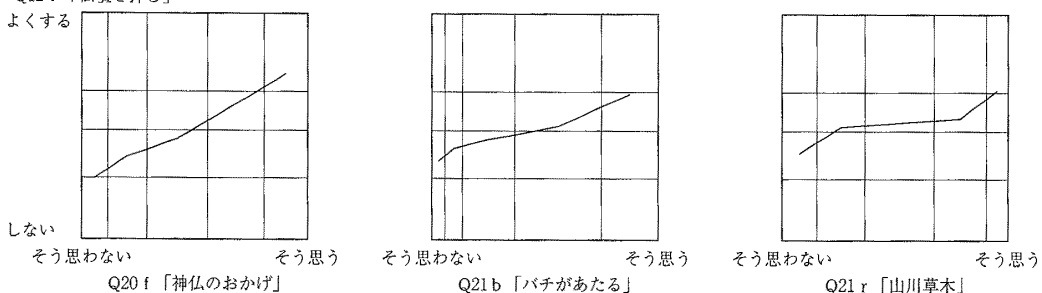
Q12e 「礼拝・お勤め」と Q20 f 「神仏のおかげ」、Q21 b 「バチがあたる」、Q21 r 「山川草木」との関係

Q12e 「礼拝・お勤め」



Q12 i 「仏壇を拜む」と Q20 f 「神仏のおかげ」、Q21 b 「バチがあたる」、Q21 r 「山川草木」との関係

Q12 i 「仏壇を拜む」



さて、今回の「価値観と宗教意識に関する全国調査」の調査票で用いられた質問諸項目、①宗教的な行動に関する諸項目、②神仏・霊魂・輪廻などの存在に関する諸項目、③宗教的な信念・感情・意識に関する諸項目、④宗教のはたらき・機能・性質に関する諸項目、についていえば、①は involvement、②③④は attitude ということができる。そこで、今回のデータ分析の最後の課題は、このような component 間関係の分析ということである。このアイデアは、いうまでもなくファセット・セオリーという「一般理論 (general theory)」から導きだされるものであるが、筆者の理論的関心はこの点につけるものではない。じつは比較の視座からする日本人の宗教意識と宗教行動についての「特定理論 (substantive

theory)」も、筆者の関心を強く引くものである。一例をあげるならば、質問紙法にもとづく大規模な国際比較調査の嚆矢となった「ヨーロッパ価値観調査 (European Value Studies)」との比較をねらって日本で実施された「価値観調査」[ロバート・キサラ、永井美紀子、山田真茂留、2007]の分析では、「日本における慣習化された宗教行動」という性格づけがなされている。しかし、このような「日本人の宗教行動」が、すでに述べてきたような「人びとの心のなかに生きつづけている日本独自の宗教意識」と無縁のものとは考えられない。慣習化されていると思われるながら、そのような行動の背後には、やはり広い意味での日本人の宗教意識がいきづいていっているのではなからうか。初詣などは単なるお祭り騒ぎにすぎな

いといわれることもあるが、そのお祭り騒ぎのなかにおいてさえ、人びとの素朴な宗教心を見ることができるとするのが筆者の仮説的洞察である。

以上のような問題関心から、ここでは「宗教的な行動の諸項目」と「宗教的な信念・感情・意識の諸項目」との関係の分析を試みた。具体的にいうならば、「宗教的な行動の諸項目」から、①「信仰表出的行動」の1つとして「礼拝・お勤め」を、②「伝統・習慣的行動」の1つとして「仏壇を拜む」を、③「イベント的行動」の1つとして「お守り・おふだ」を、それぞれ取りあげ、それと「日本独自の宗教意識の諸項目」から選んだ①「神仏のおかげ」、②「バチが当たる」、③「山川草木」、との関係を測定した。結果は図10に示したとおりである。

この結果から、どのケースについても、それぞれの関係は右上がりの monotone の形となっていることがわかる。つまり、「宗教的な行動」と「日本独自の宗教意識」とは決して別々のものというのではなく、両者はしっかりと結びついているということである。こうして、筆者の仮説は、この点において実証的に検証されたといえるのである。

V. おわりに

以上のデータ分析をとおして、少なくともはじめの問題関心の前半部分には答えることができたといえる。それは、日本人の宗教行動・意識・意見の全体像を実証的に捉えるという問題関心であり、それに対するここでの結果は、以下のようにまとめられる。

(1) 宗教的な行動については、「信仰表出的行動」「伝統・習慣的行動」「イベント的行動」が空間布置の領域区分にもとづいてははっきりと区別され、「信仰表出的行動」を「する」と答える人の割合はほかの行動とくらべて低い。世俗化という概念を人びとが「信仰(表出)」といったものから離脱していく現象として理解するならば、以上のような日本人の宗教行動は明らかに「世俗化」という性格づけがなされるものといわなければならない。しかし、他方において、「墓参りをする」78%、「仏壇を拜む」52%という回答者の割合

は、「世俗化」ということが叫ばれながらも、少なくともこのような形での宗教的慣習は維持されているということを示している。

(2) 神仏・霊魂・輪廻などの存在については、人びとの心のなかで「神仏」と「死後の世界・霊魂・輪廻・守護霊」と「UFO」はそれぞれ別の意味空間を構成している。そして、「神仏」と「霊魂」については、60%を越える人びとがその存在に肯定的な回答を寄せている。

(3) 宗教的な信念・感情・意識については、それぞれの項目の意味連関の空間布置が「信仰をもっている」という項目を中心に置いた場合は、それと近い項目として、まず「宗教的な心が大切」があり、それに「加護・救い」「おかげ・祖先との心のつながり」、そして「心が落ち着く・畏れ」がつづく。さらに、「バチが当たる」「宗教的自然観」がくるが、「メモリアリズム」と「第六感」ははじめの「信仰をもっている」からやや遠くに位置している。そして、それぞれの項目に対する回答の分布から見れば、日本人の宗教性 (religiosity) については、「信仰をもっている」としてその「信仰している宗教」(帰属宗派あるいは宗教団体) をあげる回答者は30%程度にとどまるものの、それ以外の人びとも決して宗教的なものを否定しているわけではなく、日本独自の宗教意識は依然として人びとの心のなかに生きつづけているというのが実相であるといえよう。

(4) 宗教のはたらき・機能・性質については、それらについての13のステートメントが、宗教についての「肯定的な内容のステートメント」と「否定的な内容のステートメント」に大きく2分され、どちらかといえば、前者のステートメントに対して「そう思わない」と答える回答者が多いようである。つまり、人びとは「宗教のはたらき」に対しては、やや否定的であるように見える。

さて、以上のようなデータ分析から得られた諸知見 (findings) をどのように解釈 (interpretation) するかが、つぎの重要な課題となってくる。ここでは、近年、宗教社会学の領域で注目されるようになってきた2つの主要な概念・命題・理論を取りあげ、それらの視座のなかに今回の諸知見を位置づけていくという方向を示唆しておきたい。そ

の1つは、「世俗化 (secularization)」であり、もう1つは「宗教的多元主義 (religious pluralism)」である。それぞれの考え方については、以下のようによままとめておくことができるであろう。

(1) 世俗化

世俗化という同じ用語が用いられながら、それが同じ現象を意味しているかということ、必ずしもそうではない。それは一方で「教会の会員数の減少」「教会活動への参加の低下」を意味するとともに、他方で、人びとの心のよりどころの「超越的なもの」から「内面的なもの」への移行を示唆している (Lawrence, 1998) といえる。また、「世俗化」という現象は、社会的レベル、宗教団体レベル、個人的レベルの3つのレベルに分けて分析する必要がある。個人的レベルではさまざまな宗教のなかから個々人が自分に合うものを選んで再構成する「宗教的寄せ木細工 (religious bricolage)」あるいは「アラカルト式宗教 (a religion à la carte)」という方向がでてくる (Dobbelaere, 1981, 1995, 2002)。

(2) 宗教的多元主義

後期近代社会では伝統的な教会や宗教的な制度にとってかわって、「見えない宗教 (invisible religion)」が現れる (Luckmann, 1967)。つまり伝統的な宗教形態は弱体化していくが、人びとの宗教心が衰えていくのではない。人びとは高度に分化した多様な社会のなかで、それぞれの宗教を求めていく。この考え方は宗教研究の門戸を広げた。たとえば、「発展の進んだ社会では人生の意味や目的を深く考える人びとが増えるが、そのような人びとは伝統的な信仰や既成の宗教団体には背を向ける人びとでもある」 (Inglehart, 1997, Norris と Inglehart, 2004) という知見も見出されている。

最後に、この論文のはじめの問題関心の後半部分についての検証と考察が、今後のもう1つの重要な課題として残されているという点を確認しておかなければならない。それはいうまでもなく、「日本人の宗教行動・意識・意見」は「人びとの社会的な価値・信念・態度」とどのように結びついており、どのような関係の構造にあるのか、についてのデータ分析とその知見をめぐる考察ということである。このような点についての論述を

待って、初めてこの論文は一応の完結を見ることになるのである。

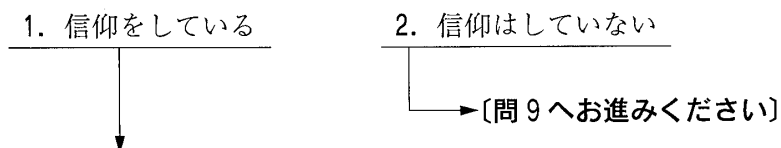
文献

- Dobbelaere, K., 1981, *Secularization*, London: Sage.
- Dobbelaere, K., 1995, Religion in Europe and North America. In R. de Moor (Ed.), *Values in Western Societies*, Tilburg: Tilburg University Press.
- Dobbelaere, K., 2002, *Secularization: An analysis at three levels*, Bern etc.: Publishing Group Peter Lang.
- 林 文、2007、『身近な生活における伝統文化意識に関する調査——2006年横浜市4区郵送調査報告書——』東京：東洋英和女学院大学
- Inglehart, R., 1997, *Modernization and Postmodernization: Cultural, economic and political change in 43 societies*, Princeton: Princeton University Press.
- 井上順孝、2003、『若者における変わる宗教意識と変わらぬ宗教意識』東京：國學院大學
- 石井研士、2007、『データブック現代日本人の宗教 [増補改訂版]』東京：新曜社
- Jagodzinski, Wolfgang and Kazufumi Manabe, 2003, In search of Japanese Religiosity, *Kwansei Gakuin University Social Sciences Review* (Vol. 7).
- 金児暁嗣、1997、『日本人の宗教性——オカゲとタタリの社会心理学——』東京：新曜社
- キサラ・ロバート、永井美紀子、山田真茂留、2007、『信頼社会のゆくえ——価値観調査に見る日本人の自画像——』東京：ハーベスト社
- Lawrence, B. B., 1998, From Fundamentalism to Fundamentalisms: A religious ideology in multiple forms. In P. Heelas (Ed.), *Religion, Modernity and Postmodernity*, Oxford: Blackwell.
- Luckmann, T., 1967, *The Invisible Religion*, New York: Macmillan.
- 真鍋一史、1993、『社会・世論調査のデータ解析』東京：慶應義塾大学出版会
- 真鍋一史、Wolfgang Jagodzinski、2000、「家族と宗教——価値志向の視座から——」『関西学院大学社会学部紀要』(第88号)
- 真鍋一史、Wolfgang Jagodzinski、小野寺典子、2000、「ドイツと日本における家族志向と宗教——ISSP 宗教調査データの分析——」『NHK 放送文化調査研究年報』(第45集)
- Manabe, Kazufumi, 2001, *Facet Theory and Studies of Japanese Society: From a comparative perspective*, Bonn: Bier'sche Verlangsanstalt.
- 真鍋一史、2002、「ファセット：ファセット・デザイン、ファセット・アナリシス、ファセット・セオリー」『ファセット理論と解析事例』京都：ナカニ

- シヤ出版
- 真鍋一史、Wolfgang Jagodzinski、2002、「家族と宗教——『世界価値観調査 (World Values Survey)』データの分析——」『関西学院大学社会学部紀要』(第91号)
- Manabe, Kazufumi, Wolfgang Jagodzinski and Noriko Onodera, 2002, Family Values and Religion in Germany and Japan: An analysis of ISSP data, *Kwansei Gakuin University Social Sciences Review* (Vol. 6).
- Manabe, Kazufumi, Wolfgang Jagodzinski, 2002, Family Values and Religion in Germany and Japan: Theoretical discussions and empirical findings, 『関西学院大学社会学部紀要』(第92号)
- 真鍋一史、2003、「ドイツと日本における『家族にかかわる価値観』と『宗教』との関係——探索的データ解析——」『よろん [日本世論調査協会報]』(第91号)
- 真鍋一史、2003、『国際比較調査の方法と解析』東京：慶應義塾大学出版会
- Merton, Robert K., 1957, *Social Theory and Social Structure*, Glencoe: Free Press. (=1961、森東吾ほか訳『社会理論と社会構造』東京：みすず書房)
- NHK 放送世論調査所、1984、『日本人の宗教意識』東京：日本放送出版協会
- 西脇 良、2004、『日本人の宗教的自然観』京都：ミネルヴァ書房
- Norris, P. and R. Inglehart, 2004, *Sacred and Secular: Religion and politics worldwide*. Cambridge, MA: Cambridge University Press.
- 小野寺典子、1999、「日本人の宗教意識——ISSP 国際比較調査 日本の結果から——」NHK 放送文化研究所『放送研究と調査』(5月号)
- Parsons, Talcott, 1954, *Essays in Sociological Theory*, Glencoe: The Free Press.
- 柳川啓一、1989、『宗教学とは何か』京都：法藏館

資料 調査票の一部

問7. あなた自身は、なにか宗教を信仰していますか。



【信仰をしている方におたずねします。】

問8. あなたが信仰している宗教は、この中のどれにあたりますか。1つだけ○をつけてください。

- | | |
|-----------------|-------------------|
| 1. 天台宗・真言宗系 | 6. 創価学会 |
| 2. 浄土宗・浄土真宗系 | 7. 立正佼成会 |
| 3. 禅宗（臨済宗・曹洞宗）系 | 8. 神道または神道系 |
| 4. 日蓮宗系 | 9. キリスト教またはキリスト教系 |
| 5. その他の仏教系 | 10. その他の宗教 |
| （具体的に | |
| ） | |
-

【全員の方におたずねします。】

問9. 今の日本にはさまざまな宗教がありますが、あなたが信仰している宗教も含めて、親しみを感じる宗教はどれですか。いくつでも○をつけてください。

- | | |
|----------|-----------|
| 1. 神道 | 4. イスラム教 |
| 2. 仏教 | 5. その他の宗教 |
| 3. キリスト教 | （具体的に |
| ） | |
-

問10. あなたはお正月に初詣に行きますか。

- | | | | |
|-------|-----------|---------|----------|
| 1. | 2. | 3. | 4. |
| いつも行く | 行くことの方が多い | あまり行かない | まったく行かない |
-

問12. 以下のaからiにあげることがらで、あなたが行なっていることがありますか。それぞれについて、あてはまるものを1つずつ選んで○をつけてください。

	よくする	時々する	たまにする	しない
a. お盆やお彼岸などに墓参りをする……………	1	2	3	4
b. おみくじを引く……………	1	2	3	4
c. お守りやおふだ（交通安全や入試合格など）を買う…	1	2	3	4
d. 商売繁盛や入試合格などを祈願しに、お寺・神社・教会に行く……………	1	2	3	4
e. ふだんから礼拝やお勤めなど宗教的な行ないをする…	1	2	3	4
f. 聖書や経典など宗教関係の本を読む……………	1	2	3	4
g. 決まった日に神社やお寺にお参りに行ったり、教会へ行く……………	1	2	3	4
h. 神棚を拝む……………	1	2	3	4
i. 仏壇を拝む……………	1	2	3	4

問19. 以下の a から f にあげるものを、あなたは「ある」と思いますか。それぞれについて、あてはまるものを 1 つずつ 選んで○をつけてください。

	ある	あるような気がする	ないような気がする	ない	わからない
a. 神や仏.....	1	2	3	4	5
b. 死後の世界.....	1	2	3	4	5
c. 輪廻転生 (生まれ変わり) <small>りんね</small>	1	2	3	4	5
d. 霊魂 (たましい)	1	2	3	4	5
e. 守護霊.....	1	2	3	4	5
f. UFO.....	1	2	3	4	5

問20. 以下の a から h にあげることがらについて、あなたはどのようにお考えですか。それぞれについて、あてはまるものを 1 つずつ 選んで○をつけてください。

	そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない
a. 祖先の人たちとは深い心のつながりを感じる.....	1	2	3	4	5
b. 神社やお寺、教会では心が落ち着く.....	1	2	3	4	5
c. 神社やお寺、教会ではゴミを捨てたり、汚 <small>けが</small> したりする ようなことはできない.....	1	2	3	4	5
d. 神社やお寺、教会では自然と手を合わせたくなる	1	2	3	4	5
e. なにか困ったことがあるときは、「神さま仏さま」と心 の中で叫びたくなる.....	1	2	3	4	5
f. 何ごともなく毎日生活できることは、神仏のおかげだ と思う.....	1	2	3	4	5
g. 神や仏に願いごとをすると、なんとなくかなえて くれそうな気がする.....	1	2	3	4	5
h. 祖先の霊は、ずっとどこかで生きていてわれわれ 子孫をいつも見守ってくれている.....	1	2	3	4	5

問21. 以下のaからrにあげるものがらについて、あなたはどのようにお考えですか。それぞれについて、あてはまるものを1つずつ選んで○をつけてください。

	そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない
a. 先祖を供養しない人は、信仰のない証拠である……………	1	2	3	4	5
b. 神仏をそまつにするとバチ（罰）があたる……………	1	2	3	4	5
c. 亡くなった家族との思い出は、大切である……………	1	2	3	4	5
d. 神仏に救われるとは、この世でうまくいくことだと思う……………	1	2	3	4	5
e. この世のよい行いは、来世で報われる……………	1	2	3	4	5
f. 神さまといっても仏さまといっても同じである……………	1	2	3	4	5
g. この世のしあわせの方が来世の救いよりも大切である	1	2	3	4	5
h. 大きな古い木をみかけたとき、なにか神々しい気持ちをいさぐ……………	1	2	3	4	5
i. 日の出や日没、または月の光に、なにかあらたまった気持ちになる……………	1	2	3	4	5
j. いま、ここでの瞬間が大切なひとときだと感じる……………	1	2	3	4	5
k. 自分はなにか大きな見えない力によって「生かされている」と感じる……………	1	2	3	4	5
l. 賛美歌やゴスペル、あるいはお経やご詠歌 <small>えいか</small> などを聞くと、心が落ち着いたり、あらたまった気持ちになる……………	1	2	3	4	5
m. 神仏は、畏れ多いものである……………	1	2	3	4	5
n. 仏壇を拝んだり、お墓参りをするときには、ご先祖さまというよりも亡くなった父母や祖父母を思い浮かべる	1	2	3	4	5
o. 誰も見ていなくても、よくないことをすると、バチ（罰）があたる……………	1	2	3	4	5
p. ときどき、これから何が起ころうとしているかを教えてくれる、第六感が自分にはあるように思える……………	1	2	3	4	5
q. すぐれた芸術作品からは、宗教的なものが感じられることがある……………	1	2	3	4	5
r. 山や川や、草や木など、すべてに霊がやどっているような気がする……………	1	2	3	4	5

問23. あなたは宗教をどのようなものだとお考えですか。a から m までのそれぞれについて、あてはまるものを1つずつ選んで○をつけてください。

	そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない
a. 宗教は争いを生む……………	1	2	3	4	5
b. 宗教は人間の弱さのあらわれである……………	1	2	3	4	5
c. 宗教はうさんくさいものである……………	1	2	3	4	5
d. 宗教を信じるとだまされて、金をまきあげられたりする……………	1	2	3	4	5
e. 宗教は私には理解できない……………	1	2	3	4	5
f. 宗教は心の安らぎをあたえてくれる……………	1	2	3	4	5
g. 宗教はご利益を与えてくれる……………	1	2	3	4	5
h. 宗教は世界平和に貢献する……………	1	2	3	4	5
i. 宗教は本当の自分や人生の意味を教えてくれる……………	1	2	3	4	5
j. 宗教は深い人間関係をもたらす……………	1	2	3	4	5
k. 宗教は、自分や自分の人生を変える力がある……………	1	2	3	4	5
l. 信仰心の強い人々は、信仰を持たない人々に対して不寛容になりがちである……………	1	2	3	4	5
m. 信仰心の強い人々は、他の信仰を持つ人々に対して不寛容になりがちである……………	1	2	3	4	5

問24. それでは、今までの宗教にはかかわりなく、「宗教的な心」というものを大切だと思えますか、それとも大切だとは思いませんか。1つだけ○をつけてください。

- | | | | |
|--------|--------------|------------------|---------------|
| 1. | 2. | 3. | 4. |
| 大切だと思う | まあ大切だと思
う | あまり大切だとは
思わない | 大切だとは
思わない |

The Structure of Japanese Religiosity

ABSTRACT

I. Introduction

In recent years, the social sciences have seen a re-emergence of research focused on the theme of “values,” for example, the appearance of post-modern values, based on new dimensions. Since the 1980s, several large-scale international comparative surveys have been conducted that focus on people’s beliefs and values, including the European Values Studies, the World Values Survey and the International Social Survey Programme. The questionnaires used in these surveys focus on “religiosity.” The results have shown that while religiosity is strongly linked to people’s beliefs, values and attitudes in Western countries, that tendency is not evident in Japan. The generalized use of the phrase “non-religious Japan” is also derived from this context. This perspective, however, is based on Western religious views, and an examination informed by Japan’s distinctive religiosity would undoubtedly shed some light on other aspects that might not otherwise be evident. That is the key purpose of this questionnaire survey.

II. Survey Outline

The sample was obtained using a two-stage stratified nationwide random sampling of men and women aged 20 and older from the Basic Resident Registry as of March 31, 2006. The survey was conducted in March 2007. A survey company (Central Research Services, Inc.) was entrusted to conduct the survey using the leave-and-pick-up method. Valid responses were collected from 882 respondents, yielding a response rate of 49.2%.

III. Data Analysis Method

The data analysis method used was Facet Analysis, developed by Louis Guttman, and specifically the two methods of Smallest Space Analysis and Median Regression Analysis. I have labeled the current data analysis an “exploratory data analysis,” and have selected these methods because they are extremely effective tools for conducting exploratory work.

IV. Smallest Space Analysis

1. Smallest Space Analysis of Question Items Related to Religious Behaviors

The SSA map shows that the question items related to religious behaviors are divided into three groups: ① Worship, devotions, the Bible, sacred scriptures, and shrine or temple visits, ② Visiting ancestors’ graves, household shrines, household altars, and ③ Visiting a shrine on New Year’s Day, fortune-telling sticks, protective charms, amulets, prayer.

2. Smallest Space Analysis of Question Items Related to Another World

According to the SSA map the question items are divided into those regarding: ① Deities, ② Life after death, reincarnation, souls, guardian souls, and ③ UFOs.

3. Smallest Space Analysis of Question Items Related to Religious Beliefs, Feelings and Attitudes

The question items that are close to the position of “holding religious beliefs” are “a religious mind is important,” followed by “protection and salvation,” “gratitude and emotional connection with ancestors,” a sense of peace or awe,” then the belief that “bad behavior will be punished,” and “a religious view of nature.” However, “exhibiting memorialism” and the feeling that the “this moment is important” are located a fair distance away from “holds religious beliefs.” This SSA map is important insofar as it clearly shows the various aspects of the religiosity of the Japanese.

4. Smallest Space Analysis of Question items Related to the Workings, Functions and Characteristics of Religion

This SSA map shows that the question items related to the workings, functions and characteristics of religion are divided into two categories: those with positive content and those with negative content.

V. Median Regression Analysis

The next step after Smallest Space Analysis is to explore the relationship between “religious behaviors” and “religious feelings and attitudes”. These results suggest that the relationship in each of these cases has a monotone shape that rises upward to the right. That is, “religious behaviors” and “religious feelings and attitudes” are not distinct and separate items, but are closely linked to one another.

Key Words: religious behaviors, religious beliefs, feelings and attitudes, the workings, functions and characteristics of religion